

基幹システムの刷新をグローバルで取り組むバルカー。来期には完了し、本社では財務、販売、製造の一元管理、各拠点ではサブシステムを活用した業務高度化を実現する。新システムの進捗や今後の展開について立田寛執行役員・総務部長兼IT戦略担当に聞いた。

「基幹システム導入の進捗は。」

「この2年間で7割以上の拠点を終わらせた。今年度末には、当初の目標の一つであったが連結決算のシステム化も実現する。来期には、全拠点への導入を終わらせるが、投資額も十数億円と当初予算に収まる見込みだ。クラウドサーバに移行したことで、メンテナンス費用も低減できることから想定以上の経済効果を得られそうだ。新型コロナウイルス感染症影響を考える

バルカー、基幹システム刷新へ

受注予想・最適生産など自動化

と、順調に進められたと評価している。

「新システムの効果は。」

「旧システムは『SAP・R/3』をベースとしたもので販売管理を主とするものだ。生産管理機能もな

り、限定的な運用であった。そこで、新システムには

『SAP・S/4 HANA』をプラットフォームに生産管理システムなど当社の事業に必要な機能を盛り

込んだ。しかし、デジタルを軸とした全業務の高度化、効率化には、各拠点の活動に応じたサブシステムが必要不可欠なことが分

り、現在各拠点に導入を進めている。新システムは当社独自のテンプレートを作成した

ので、今後の導入のスピードも図っている」

「サブシステムとは具体的に。」

「二例であるが、当社の営業拠点に届く顧客からのオーダーは、どの製品・品種がいつまでにどのくらい必要かを示すことまで。当社の生産する機種および台数であることが多い。これまでは、品は、顧客ごとにカスタマイズしているケースが多

く、今後、受注が予想される品種やボリュームを、人々の手を使って洗い出し、場

合によっては受注前から準備していた。これを1日に

つき数百件、ある意味「人海戦術」に近いかたちで対応してきた。これを新システムとサブシステムとができた」

「連結決算については。」

「各拠点の決算情報をネットワークし、連結決算用データを作成をシステム化

しており、下期にはあわせて監査法人に提出する資料作成も簡略化

されそうだ。生産管理も同様で、新システムでできる

算となる。監査業務の厳格

化が進むなか、得られる効果は大きいと考える」

「経営判断のスピード化には。」

「データの自動収集と加工・統合機能を有する『フ

キールBI』を導入し、業務に必要なデータを常に手

元にある状態にする。経営層は、分析された日々の活動状況をグローバルかつリアルタイムで把握し、迅速な投資判断につなげる」

「今年スタートした2カ年の新中期経営計画では、新システムの導入をグローバルで完了し、より効率的な活用を追求したい。その後は、人工知能(AI)プラットフォームフォームなどの連携により市場予測をベースとした受注や生産分析を提示していく。攻めのシステムへ」と発展させていきたい」(阿桑健太郎、井上諒)



立田 寛

執行役員・総務部長
兼IT戦略担当

デジタル社会